様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８０１６２

研究課題名（和文）デルヴェニ・パピルスの解読・翻訳―古代ギリシアにおける多神教と一神教の関係

研究課題名（英文）The Derveni Papyrus and its historical backgound

研究代表者
桜井　万里子（Sakurai, Mariko）

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：９００１１３２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：過去3年間にDPのテクストの暫定訳を済ませたが、復元についての検討はもちろん、語彙についても、より高度な精査が必要であると認識している。他方、「オルフェウス教」に関する最近の研究動向が、本研究の姿勢と一致することを確認でき、それが研究を進めていく際の後押しとなった。そのようななかでDPの翻訳作業を続けたのだが、「オルフェウス教」の儀礼の形成に、エレウシスの秘儀からの影響とともに、ペルシアの影響も無視できない。その結果、前５世紀の「オルフェウス教」を古代ギリシア宗教全体のなかで位置づけるにも、当時のギリシアとペルシアの関係が深く関わっているという前提の下に研究を進めるべきである、との結論を得た。

研究成果の概要（英文）：I have finished the rough translation of the DP text, but have to admit that I need to improve it by way of inspecting Editio Princeps more in detail and other provisionally edited texts and their commentaries as carefully as possible. At the same time, I have been studying on the Orphism in the fifth century during which the author of DP lived his life, and got a conclusion that Orphism in DP could be understood more appropriately and accurately from a perspective of the international and intercultural relation between Greece and Persia.

研究分野：西洋史，古代ギリシア史

キーワード：古代ギリシア　アテナイ　デルヴェニ　ペルシア　宗教　多神教　一神教　オルフェウス

１．研究開始当初の背景

本研究課題の対象であるデルヴェニ・パピルス（以下 DP）とは、1962 年にテッサロニキの北 9.5 キロのデルヴェニで発掘された 7 基の墳墓群の中の 1 基(墳墓 A)から出土した、焼け焦げた巻子状のパピルスである。読取れるところから窺えるその内容の特徴は、前 5 世紀末頃の一人の知識人による著作で、彼のコスモロジーが著されており、とりわけ、第 18 コラム第 3 行と第 6 行に「オルフェウス」の名が明記されていることから、大きな注目を集めた。しかも、ギリシア最古のパピルスであることから、史料としての価値も極めて高いことは異論の余地のないところであったが、わが国では本格的な研究は研究代表者桜井万里子による 2 論文に留まっていたばかりでなく、すでに欧米で刊行されている文献も多くの学術機関に所蔵されていない状況であった。そこで、まず文献の収集から始めなければならなかった。加えて、オルフェウスの名が記されていることから、当該パピルスがいわゆる「オルフェウス教」に関連している作品であると考えられた。ちなみに、オルフェウス教（英語では Orphism）とは、伝説上の音楽の名手オルフェウスを教祖とする祭祀を指す。ただし、オルフェウス教という呼称はあたかも信者たちによる教団組織が存在していたかのようだが、そのような組織の存在は確認されていないので、オルフェウス教よりも「オルフェウスの秘儀」と呼ぶ方がより実態に近いと考えられる。ただし、煩瑣を避けるため、当該研究では応募の時点から「オルフェウス教」とカッコ付きで呼ぶことにした。この桜井の方針は、R.G.Edmonds III（*Redefining Ancient Orphism, A Study in Greek Religion*, Cambridge, 2013）の「オルフェウス教」の評価と見方が一致することを、文献収集を行った初年度に確認した。

２．研究の目的

DP の作成年代は前 5 世紀末頃と推定されているため、DP が古代ギリシア世界が最も繁栄していた前 5 世紀における「オルフェウス教」の実態を知る最良の史料であることは言うまでもない。一神教に近い特質をもつとされて、キリスト教の教父たちに影響を与えたと言われている「オルフェウス教」の実態を解明して、多神教の時代の前 5 世紀において一神教成立の胚芽を潜在させていたのか、そうであれば、それはどのようにしてだったのか、を解明することが本課題の研究目的である。

３．研究の方法

DP は欠損部が多く、断片的に判読が可能な部分も多いので、まず、テキストの解読と読み込みを行い、次いでテキストの内容解釈を分析的に行う、という方法をとった。それと並行させて、DP 所蔵のテッサロニキ考古学博物館で DP の実見を行い、どこまで判読可能か、確認を試みた。実見の結果、パピルスの現状は予想以上に劣悪で、現存するパピルス断片はいずれも炭化し、肉 no 眼で読むことは不可能で、赤外線カメラで撮影してようやく判読可能、というものだった。2006 年に刊行された最初の校訂版（EP）の校訂者たちの労を多としながらも、できるだけ予断を持たずにテクスト解釈を遂行して、内容分析に踏み込んだ。

４．研究成果

DP は、「オルフェウス教」との関連が間違いないため、従来から「オルフェウス文書」として伝えられてきた文書群に新たに追加すべき文書であるという位置づけがなされた。オルフェウス文書は、キリスト教成立を支えたヘレニズム時代の思想の中心を成していたため、その重要性については分厚い研究の蓄積がある。ただしそこでは、このオルフェウス文書はプラトンよりもはるかに以前に成立したという想定のもとに議論は進められてきたのである。しかし、各文書の年代確定作業の結果、今やそれは完全に否定されている。オルフェウス文書は、いずれもヘレニズム以降の成立であることが明らかにされたからである。従って、古典期のオルフェウス教の特質については、全面的に書き改められなければならない。

前 5 世紀にこの「オルフェウス文書」の存在が想定された理由は、エウリピデス作の悲劇『ヒッポリュトス』953～954 行の以下の記述に依拠するところが大きい。「さあせいぜい得意がって、菜食主義者を気取って、オルフェウスを教祖に祭り上げ、煙のようなたくさんの経文(grammmata)を崇め奉っては、バッコスの秘儀に耽っているがよかろう。」

この台詞に基づき、「オルフェウス教」は、多くの書物を持つとみなされてきた。もしそうであるならば、経典を持たないことが特徴の一つとみなされている古代ギリシアの宗教の中で、確かに「オルフェウス教」は特異な存在ということになる。果たして、この点はどうであろうか。

たとえば、エレウシスの秘儀の場合、伝統的な秘儀の式次第について説くのは、名門エウモルピダイ家出身のエクセゲーテース（儀礼解説者、exegetes）たちである。彼らは代々エウモルピダイ家に伝えられてきた不文律を解説する役割を担っていた。これに対し、「オルフェウス教」の場合は儀礼に関連する情報を文書に明記したということなのだろうか。言い換えれば、文字による知の伝達が行われていた、ということだろうか。

この問題については、参考史料として、デモステネスの代表作である第 18 弁論『冠について』259 節の記述に注目したい。そこでは、デモステネスの政敵アイスキネスは、母親が自宅で執り行う宗教儀礼を手助けする際に書物(bibloi)を読み上げた、とあり、この

bibloi は、上に引用したエウリピデス『ヒッポリュトス』の「文書（grammata)」と似ている。したがって、民間の祭祀において何らかの書き物が用いられていたことはここに明らかである。つまり、アイスキネスの母親が関与している宗教儀礼は、今日にその名が伝えられていない弱小の祭祀とみられるが、母親はそこでの儀礼実践の際に文書を用いていたようだ。したがって、「オルフェウス教」が文書を用いたことは、必ずしも特異であったとは言えないかもしれない。むしろ、エレウシスの秘儀に比べ、新興であるがゆえか、宗教儀礼に関する知を共有するために文書を必要とした、という事情があったことを確認しておくべきであろう。
前述の Edmonds は、「オルフェウス文書」の改訂版として近年刊行された A.Bernabe,

Poetae Epici Graeci: Testimonia et

Fragmenta, Pars II:Orophicorum et

Orphics:Simillium Testimonia et

Fragmenta,Fasc.I, München/Leipzig, 2004

の編纂姿勢にも懐疑的である。つまり、「オルフェウス文書」の体系化はオルフェウス教という宗教または宗教思想の存在を前提として行われており、この前提が崩れれば当然体系化自体も意味をなさないことになる。それはすなわち、DP の研究、解読、解釈もその「体系化」された文書群と切り離して行うことが適切であることを意味する。ここから、本研究課題の設定が適切であったということができる。
「オルフェウス教」について研究代表者桜井は、それが宗教思想、宗教運動と呼べるほど、の実態であったのか、疑問を抱いていたので、「オルフェウス教」儀礼執行者について、各地を渡り歩いて個別に信者に接触する遊行の導師のような存在ではないか、と日本の江戸時代末から明治時代の遊行勧請僧の場合に比定して、結論し、平成 26 年 4 月に在アテネ英国考古学研究所でのコロキアムで報告した。
また、DP の第 6 コラムに「ミュスタイ」や「マゴイ（マゴスの複数形)」という語が現れることに注目した。
以下は第 6 コラムの試訳である。
「祈りと供儀は魂を宥める。そして、マゴスたちの魅惑的な歌は、道を遮るダイモンたちを排除することができる。道を遮るダイモンたちは魂に対し敵対する。供儀をマゴスたちがするのはこのためである。あたかも代償金を支払うかのように。そして、彼らは聖なるもの（供物）に対して水と乳を注ぐ。そこから彼らは（死者への）献酒も行う。彼らは丸型菓子を無数、たくさんのヘソ（のような突起）で装飾して、供える。魂も無数であるから、ミュスタイはエウメネスたちに予備の供儀をする、マゴスがするのと同様に。なぜなら、エウメネスがちは魂であるから。それらの故に神々に供儀しようとする者は、前段の供儀として鳥を一羽供えること。」
このテキストは別の校訂の試みも提案されていて、読みは確定しているとは言い難いが、マゴスの存在は間違いない。
マゴスについては、ヘロドトス『歴史』1.132 に、ペルシアでは祭りの際に犠牲獣の肉を煮て、供儀する際に、マゴスは神々の誕生を歌った祈祷の呪文を朗唱する、とある。他方で、ギリシアでは、神々の系譜を朗唱する者や占い師であるというマゴスのイメージは、ソフォクレス『オイディプス王』においてはいかがわしい占い師として描かれている（387-389 行)。
DP、第 6 コラムではどちらのマゴスを指しているのか。ペルシアから伝わったマゴスかが、上記悲劇の上演された時期である前 441 年から 432 年の頃には少し歪曲された形で理解されていたのかもしれない。第 6 コラムのマゴスたちについては、ペルシア由来かギリシアのそれか、また、DP の著者自身がまごすであるのか、研究者の見方は分かれており、さらなる検討が必要である。ペルシアとの関係については、古代マケドニアは前 5 世紀に一時ペルシアの支配下にあったので、DP とマケドニアとの関係の深かさをそこに読み取るべき、という考え方もあり得よう。事実、それは、平成 27 年 11 月の古代ギリシア文化研究所第 1 回総会での研究発表において、指摘された。しかし、DP のパピルスそのものの年代は、前 340 年から 320 年のあいだと推定されており、墳墓の年代はそれ以降であることは確実である。
墳墓 A の被葬者は、副葬品に矢じりやその他の武具が含まれているので、マケドニアの王室軍の戦士である可能性が高い、と言えるかもしれない。当時のペルシアとマケドニアの関係は、すでにアレクサンドロス大王の征服でペルシア王国は瓦解している。DP に言及されているマゴイとマケドニアとの関係を重視することよりも、むしろ、前 5 世紀のギリシア本土、特にアテナイとペルシアとの関係に注目することで、新たな理解が得られるのではないか。2016 年 3 月にアテネのアクロポリス博物館で見た前 6 世紀末のペルシア兵の騎馬像は、その推測の有効性を確信させてくれた。
第 20 コラムにあるように、エレウシスの秘儀などの公的祭儀と「オルフェウス教」の宗教儀礼との決定的相違については、ポリスとの関係を軸に考えることができる（桜井万里子「オルフェウスの秘儀と古典期のアテナイ—デルヴェニ・パピルス文書を手掛かりに—」『西洋古典学研究』58 巻 (2010)、1-10)。
その記述内容と前 5 世紀末におけるマケドニア（あるいはレテ）とが果たしてどのように結びつくのか、疑問を感じざるを得ない。むしろ、本史料は今後さらに前 5 世紀のアテナイとペルシアとの関連で精査を続け、「オルフェウス教」および DP そのものの成立の歴

史的背景について研究を深めていくべきではないかと考える。3 年間の研究期間は終了したが、当該の研究課題そのものは、今後さらに新たな方向へと進めていくべき課題となった。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　２件）

① 桜井万里子　「デルヴェニ・パピルスの歴史的背景」古代ギリシア文化研究所第1回総会、2015 年 11 月 14 日、向ヶ岡ファカルティハウス、東京大学（東京都、文京区）

② Mariko Sakurai, Orphikoi in Athens and in the Derveni Papyrus, The Third Euro-Japanese Colloquium of Ancient Mediterranean World (第 3 回日欧古代地中海世界コロキアム), 2014 年 4 月 27 日、British School of Archaeology at Athens (在アテネ英国考古学研究所)（ギリシア共和国、アテネ）

〔図書〕

Mariko Sakurai, ‘ The Peplos Scene of the Parthenon Frieze and the Citizenship Law of Perikles, T.Osada(ed.), *The Parthenon Frieze:The Ritual Communication between the Goddess and the Polis*, Phoibos Verlag, Wien, 2016, 83-90.

６．研究組織

(1)研究代表者

桜井万里子

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：90011329